山高く切岸峨々として南北は沢谷深くして寄るべきようぞなかりけり、東西厳々たる岩石に細道なり、掛け引き自由ならず、よって愛季この城に立て籠るなり、大勢にて責めるともなかなかもって叶うまじ、勢の続かぬ先にこの山を責むべきと思うなり。人々承り、この儀は尤然るべし、左あらば時刻移ると叶うまじ、討手を向かわせられ候えと、皆々申し上げる。

さて、檜山の討手には兵庫守を頼むなり、御辺は切山の案内よくよく存じられ候、盛長畏って御請を申し、その勢五百八十騎給わり私宅に帰りやがて用意をなされける。

さてまた、男鹿の討手には新庄石見守、八柳長門守を大将として都合その勢千六百余騎を引き具して向かい、船越天王辺に忍びける。檜山の城に火の手上がり候わば、切って入らんと、今や今やと待ち居たる、危かりける次第なり、

三浦、五十目、馬場目、檜山へ寄する事

さるほどに、平盛長は討手の大将にて手勢都合一千余騎を引き具して、切山さしてぞ急がるる。

さてまた、家の郎等には、甲斐・大内・長谷部の一族、五十目采女正・馬場目玄蕃亮、かれこれ合わせて二千余騎、急げば程なく檜山の城へ着きにける。兵庫守、その日の大将なれば、追手の門へ向かわれける。定泰は搦手、泰時は揉み合い、三方より合図を定め、鉦・太鼓を打ち鳴らし、鬨

をどっとぞ上げにける。

これはさておき、大高相模守康澄大いに驚き、急ぎ矢倉に掛け上がり、門外きっと見渡せば、甲の星を輝かし雲霞の如く寄せ来る。こは、いかがせん、と内へ入り足軽どもに鉄砲・太刀・長刀・鎗よ弓よと、ひしめく所に寄手の大将兵庫守、烏黒という名馬に乗り鎧ふんばりつっ立ち上がり城に向かって大音上げ、ここもとへ寄せ来る某は三浦兵庫守盛長なり、いかに相模守聞き給え、この度九郎殿より討手の大将給わり罷り向かって候なり、急ぎ城を渡されよ、と高声に呼ばわりける。

その時、康澄これを聞き、何、九郎殿より討手盛長向かわれ候とや申し候、心得ぬ物哉、湊の御所の仰せもなきに城を渡すべき覚えなし、罷り帰りこの由を申されよ、と打ち笑いてぞ居たりける。

寄手の人々腹を立て、城を渡さじやと、さらば出物見せんと、弓・鉄砲を打ち掛ける。大高も、あれ打ち取れ者ども、と下ししければ、同じく弓・鉄砲を打ち掛ける。

両陣互いに矢叫びの声、天地も崩るるばかりなり。寄手の者ども、いざ敵に加勢の付かぬうち責め落とせ者どもと、鎗・長刀の鞘はずし城の内へ切って入らんとする所に、城の者どもも矢倉より飛んで下り、木戸を開き切って出、両陣互いに入り乱れおっつまくつつ戦いける。されども寄手は大勢なり。新手を入れ替え責め戦えば城の中の者ども、思いもよらぬ事なれば具足を着ざる者は多かりける。